

# ファーローにみるタカリーの伝統と変容

——民族誌的記録と映像人類学的研究

森田 剛 光

文化人類学専攻 後期課程 2年

## はじめに——映像人類学の有効性

ネパール・ヒマラヤの商業民族として有名なタカリーはネパール国内のチベット系民族のなかで比較的研究されているといわれる。しかしながら、1980年代半ばからタカリーに関する民族誌や報告はそれ以前と比べ激減する。最近出版されたタカリーに関する数冊の民族誌は、研究者らの過去の業績の集成が主であり、近年のタカリー社会の変化を追記していない。よってこの民族誌の空白を埋めることは発表者の研究射程の一つである。

近年デジタルカメラやビデオと言った様々な情報機器が小型化され低価格で普及するようになった。文化人類学者もこのような機器をフィールドで使用し研究のツールとして利用している。民族誌的記録の一方法として、映像におさめることは、映像の持つ特性である多量の情報と事象の再現性によってフィールドデータをさらなる濃厚なものに昇華させることが可能になる。また映像人類学は、文化人類学の一領域として応用実践的要素の強い分野であり、その媒体の性質から多くの人々に向けて発信ができる。これは学術論文とは異なった社会的インパクトを持ち、研究成果の社会

的還元が大いに可能な分野といえる。しかし、近年文化人類学のなかでとくに映像分野への関心は強まっているにもかかわらず、技術的な面で十分な研究活動を行える人材が少ないのが現状である。本稿は、筆者が1999年以降継続しているタカリー研究のうち、ファーローについては従来からの調査研究に加え、「ファーローにみるタカリーの伝統と変容～民族誌的記録と映像人類学研究」と題して、「魅力ある大学院教育」イニシアティブ 平成19年度「人文学フィールドワーカー」養成プログラム申請採択プロジェクトとして助成を受け、実施した2007年8月-9月の現地調査によるデータを中心に記す<sup>1)</sup>。

## I. タカリー

本稿では、民族的範疇の混乱を避けるため、4つのクラン、ゴウチャン (*Gauchan*)、トラチャン (*Tulachan*)、セルチャン (*Sherchan*) とバタチャン (*Bhattachan*) に属し、自称タマン (*Thaman*)<sup>2)</sup> およびタパン (*Thapan*) を名乗る人々のみをタカリーと限定し狭義に扱う<sup>3)</sup>。タカリーは、人口は約10,000人のチベット系民族の一つである。年々タカリー語話者は



タッコラ地方 (ムスタン郡)

減少傾向にある。日常的にネパール語や英語が使用される。宗教は、チベット仏教、ヒンドゥー教、ジャンクリ (*Jhankri*) またはドーム (*Dhom, Drom*) といわれるシャーマニズムをもつ。18世紀ネパール政府 (ラナ宰相家) へ近づき、塩の交易独占権を獲得し、北方高地・チベットの岩塩と牧畜生産物を、南方低地・農作物と工業製品を交換する問屋の仲介交易で富を築いた。近年ではホテル業を中心に商業活動を積極的に行う民族として知られる。



並ぶショーペン

## II. ファーロー

### 1. 女神との契約と成人の儀礼

タッコラ地方のカンティ (*Khanti*), コバン (*Kobang*), ラルジュン (*Larjung*) の村々, 総称タサン (*Thasang*) にて3日間にわたり毎年行われる<sup>4)</sup>。ファーロー (*Phalo*) は, 新年のトーランラ (*Tolanlha*) とならび重要視される。ファーローは, 元々タカリー暦の月の名称であった。ファーローに関する伝承は, タカリーの人々に強く結びついていることが示される。

#### ○ ファーローの伝承

かつて, 先祖が, 狩りに出てタサンで一匹の鹿と出会った。獲物として携えた弓で狙ったが, 矢は全く当たらず, その鹿をなかなか狩りとは出来なかった。マルサンキュー (*Marusankyu*)<sup>5)</sup> で沐浴し身を清め, 改めて鹿を追った。何日もかけ, なんとかその鹿を洞窟に追いつめた。すると, その鹿は女神へと姿を変化させた。女神の求めに応じるならば, 繁栄をもたらすと言ったという<sup>6)</sup>。人々は非礼を詫び, 女神とタカリーの間で契約が結ばれたという。それ以後タカリーは女神の契約を守り続けているのだという。



ナルサン・ゴンパ (カンティ)

カンティにあるナルサン・ゴンパ (*Narsang Gompa*) にはこの女神ナリチュワ (*Narichuwa*) の像がある。ファーローはショーペン・ラワ (*Shopen Lawa*) とも呼ばれる。ショーペン (*Shopen*) と呼ばれるこの祭りで重要な役割を果たす少年たちに由来する。純血のタカリー男児で, 7歳, 9歳, 11歳, 13歳から選ばれる。ショーペンの数はかつて13名であったが, 近年は5名に減っている。

### 2. ファーローの行程

ファーローについては, ハイデ [Heide1988] の断片的に写真とその解説, ビンディング [Vinding1998: 246] に簡単に触れられているのみでほとんど研究・記述がされてこなかった。以下ファーローの詳細について述べる。

#### ○ ファーロー第1日目

コバンの広場に面した建物でムキヤや村の人達が集まる。ラマ僧が読経する。ショーペンは, この場所でファーローの期間寝泊まりする。ショーペンに衣装が着させられ, 男性達は, 剣をもち共にナルサン・ゴンパへと向かう。

ナルサン・ゴンパのお堂前に敷物とテーブルが置かれ, ショーペンが, お酒の入った器にイトスギの枝をひたし, ふりまく。歌を歌い, お堂の周囲をまわる。ショーペンが山を下り, コバンへと向かう。男性達は, タンクンラ・プトゥ (*Thakunra putu*) といわれる棘のある木の枝を一本ずつ持ち, 途中何度もかけ声を上げながら山を下りる。家々の戸口で女性達が酒を振る舞い, お返しに女性のこめかみにヤクのバターをつけ祝福する。

ファーローは, 秋祭りの側面がある。周辺の各村から出し物が競われる。名士が, 採点官として配置され, 点数をつけ順位が決められる。上位の村には賞金



弓を撃つショーペン

がだされる。

○ ファーロー第2日目

早朝よりナルサン・ゴンパのラマ僧が、ラルジュンの南の洞窟ゴンバ・ウー (*Gomba u*) にて、ナリチュワを表す御神体であるグルチェコンドゥ (*Goluchekondu*) を制作する。ショーペンと合流し、一行は、ラルジュンへ向かう。

一方、ナウリコットにムキヤ達が集まる。ムキヤ達は「成長する石」のあるゴンパに立ち寄り、石の周りを歌いながらラルジュンへ向かう。御神体一行が到着後、河原へ移動し、男性達が、御神体を囲むように手をつなぎ、喚声を上げそのまま「聖なる木」の周りを回る。

飾られた馬に同乗の大人とショーペンが腰を紐で結ばれ、大人が馬を操る。河原には男性達と女性達が二列に並ぶ。ショーペンは、馬上から悪霊が描かれた的に一人ずつ矢を射る。投射後、列の間を通り。花ピラがまかれ、ターバンを巻きつけ、祝福を受ける。

○ ファーロー第3日目

ナルサン・ゴンパお堂の中ではラマ僧が読経する。ショーペン、ムキヤ達も歌いながらお堂の周囲を回る。ショーペンが山を一足先に下り、コバンへと向かう。コバンの広場で行われている儀式終了まで、ムキヤ達は入らずに待機する。儀礼後、ムキヤ達が、歌いながら広場に入る。若い人たちが、流行の歌や踊りを踊り騒ぎながら広場に入る。

### 3. ファーローの継承

かつてファーローは、沿道に沢山の人があふれ、祭りは13日間続き、壮大な一大行事であったと語られる。ファーローは、最盛期のトゥクチェを中心に、まず一年目の祭りが行われ、次の年にナルサン・ゴンパを中心に二年目行われていた。ショーペン役少年た



儀礼を継承するラマ僧・父子

ちは二年間続けて勤め、二年で一つの大きな祭りであった。近年、多くの者が、一同に集えず、経験と知識を持つ成員の高齢化にともない縮小し、老人達からはタカリー文化の担い手の減少を嘆く言葉が吐露する。タカリーの儀礼は、主にナルサン・ゴンパのラマ僧、父子二人が継承しているにすぎない。ショーペン役少年とその親には時間的・経済的負担も強い。年配者は、一ヶ月前から歌と踊りを訓練させられたと記憶していたが、最近訓練は行われず、その場で大人達に教わりながら行われる。ファーローは、タカリーの伝統として文化、社会に根ざしているが、現状では縮小、変更されている部分も多々ある。昨今、多くの民族集団が、自己の「伝統文化」と権利を活発に主張するにいたるネパールにおいて、自分たちの「独自の文化」を前面に具現化するための手段は、ますます重要性を増し、「伝統文化」をノスタルジーでは片づけられない。タカリーの伝統文化の一つであるファーローのあり方について、今後タカリーの人々の間で議論を重ねていく問題になっている。

### おわりに

ファーローは、タカリーを扱った民族誌や報告書の中に全くと言っていいほど記されてはいない。この意味において祭り自体を調査すること、映像として残す意味はとても大きい。また、多くの儀礼は、当然明文化されていない。

タカリーは、故郷との結びつきをとて強く持ち続けたいと願っているが、行われる儀礼に合わせてタッコラ地方へ赴くこと、ヒマラヤの険しい山道を何日もかけて歩くことは誰にでも容易なことではない。そのため、自らの伝統文化を知り、学ぶ機会も参加することも困難である。よってタカリーの「伝統」文化を

タカリー自身が継承することは、とても難しくなってきた。現在の状況をふまえるならば、記録された映像は、研究者の資料的価値以上の可能性を持つ。

2007年調査時に前年撮影編集したファーローの映像を収めたDVDをフィールドに持参し、タカリーの関係者に配布した。その映像を見せたときタカリーの人々が喜ぶ姿を目の当たりにし、映像人類学の持つ可能性を強く感じた。映像人類学は欧米では半世紀以上の歴史を持っているが、日本ではまだまだ認知度も低く今後の発展が期待される研究分野である。デジタル機器の大衆化に伴い誰もが撮影機材を容易に所有する時代にはなっているが、民族誌的映像の制作は撮影対象との密接な関係を構築せずに行うことは難しい。そのため文化人類学者がフィールドにおいて構築するラポールの結び方によってのみ撮影可能なものも多く、映像自身には希少性が常に存在する。

そして撮影行為自体も、単なる情報の採集ではなく、撮影対象者との共同作業であり、フィールドの人々との関係の構築が積極的かつ能動的なものとなる。近年、文化人類学の研究調査の行為が情報と表象の搾取であると批判にさらされる中、フィールドの人々と文化人類学者の新たな有り様を示し、文化人類学的知見をフィールドの人々に還元していく映像人類学は、新たな関係性の一モデルとなると考える。

#### 注

- 1) その成果の一部は、2007年10月行われた日本南アジア学会第20回全国大会にて「タカリーと弓——民族技術の伝統と変容——」として発表した。また、第27回ネパール研究学会

「変貌するネパール」の論集に掲載刊行され、文京学院大学にてひらかれる同シンポジウムで発表を予定している。加えて2008年5月京都大学でひらかれる文化人類学会第42回研究大会の映像人類学分科会にて上映を予定している。そして名古屋大学大学院比較人文科学研究室のwebサイトにて数点写真を公開している (<http://www.lit.nagoya-u.ac.jp/~human/>)。

- 2) この限定的な範囲の人々の自称は「タマン」というが、ネパール国内の別の民族タマン(族)と区別するため、「タマン・タカリー」と区別して呼ばれる。
- 3) タカリーの民族範疇については、[森田2007] および [森田2008b] を参照。
- 4) 2006年は8月31日から、2007年は9月18日から3日間行われた。
- 5) トククチェの北から対岸、広がった河原一帯。
- 6) 「鹿の女神」[加藤1981: 159-162]の類話が収録されている。女神は3つの条件を出した。①女神の家の建立。②両親のいない子供、後家を近づけない。③13人の少年が仕える。

#### 引用文献

- Hide, Susanne von der., 1988, *The Thakalis Of Nothe Western Nepal* Ratna Pustak Bhandar.
- 飯島茂1982, 『ヒマラヤの彼方から ネパール商業民族タカリーの生活誌』日本放送出版会
- 加藤千代1981, 「伝説の旅——タッコラ地方をゆく」日本ネパール協会編『神話と伝説の旅』古今書院, pp. 99-233.
- 森田剛光2008a 「タカリー社会の変容——タカリーの祭りファーローを事例に」『第27回ネパール研究学会「変貌するネパール」論集』日本ネパール協会(印刷中)
- 2008b 「ネパール, タカリーにおけるエスニシティの変容と展開」『東アジア研究』vol. 49, 大阪経済法科大学アジア研究所(印刷中)
- 2007.10 「民族共同体をになう社会組織の役割の位相——ネパール, タカリー社会の事例」『比較人文年報』No. 5, 名古屋大学文学研究科, pp. 153-167.
- Vinding, Michael, 1998, *The Thakali: A Himalayan ethnography* Serindia.